

【研究ノート】

ソシュールの未完の草稿の作成年代

川本 暢

1. 言語の真理と言語学者への問い

フェルディナン・ド・ソシュール（1857-1913）の未完の草稿^①（以下「草稿」と記す）が1996年に発見された。この「草稿」は、ルドルフ・エンゲラー（1930-2003）とシモン・ブーケの手によって編纂されて2002年に『一般言語学文書^②』という名で、それまでに発見されていた草稿とカップルになって出版される。本稿では、未完の「草稿」の記述を中心にして、「草稿」の成立年代に迫っていく。

はじめに、「二重性の《第一にして最終的な》原理^③」にある文章を見ながら、ソシュールが言葉をどのように捉えていて、その言葉を研究対象とする言語学者の仕事をどのように考えていたのかを見てみよう。

「言語の同一性は、二つの異質な要素の結びつきを含む絶対に特別な点をもっている。一方で、銅、金、鉄の板の化学的な種類を決定することを促すとする。そして次に、羊、牛、馬の動物学的な種類を決定することを促す。これら二つは、容易い仕事であるだろう。しかし、馬と結びついた鉄の板、牛の上に置かれた金の板、あるいは、銅の装飾をまとった羊、というこの奇妙な全体を捉えて、どんな《種類》がそれを表すのかを決定するのか、と私たちに促したとする。私たちはすぐさま、『それはバカげた仕事だ』と言いながら叫び声をあげてしまうだろう。だが言語学者は、このバカげた仕事の前に最初から立たされている、と理解しなければならぬ。[言語学者の仕事は（筆者の補足）] そのような仕事なのである。』

科学者が、「銅」や「金」や「鉄」の化学的な種類を決定して分類することは難しくない。同時に、動物学者が、「羊」や「牛」や「馬」の動物的な種類を決定して分類することも難しくない。それは、目に見えたり手で触ったりできて確認することができる《存在する事物》だからである。しかし、「馬と結びついた鉄の板」や「牛の上に置かれた金の板」や「銅の装飾をまとった羊」がどんな種類なのかを決定することはできない。なぜなら、そんな存在物は任意的にしかこの世には「存在しない」からである。自然の中に存在しない物を検証して種類を決定する仕事ほど、遂行して「バカげたこと」にはほかならないと思ってしまう。しかし、言語学者は、科学者や動物学者と違って、目にも見えずに触って確かめることもできない「言葉」を研究対象にしている。

ソシュールは、物理的な存在でない言葉（実体として捉えられないもの）を研究するのが言語学者であって、そうした研究対象の言葉を言葉でもって分類していくのが、言語学者の仕事であると述べている。

さらに、続きの文章を見てみる。

「はっきりと言わせてもらえば、言語学者は、こっそりと抜け出すようなやり方で、そこから免れようとしている。すなわち、論理的に見えるようなやり方で、観念を分類して、次に形態を理解しようとする。それとは逆に、形態を分類して、次に観念を理解しようとする。そして、二つのケースにおいて、言語学者は、自分の研究とそれらの分類の明確な対象 [=記号 (筆者の補足)] を、何が構成するのかということを理解していない。二つの領域を結びつける点をまさしく知るべきである。」

言語学者は、言葉を「観念」と「形態」に分類すると述べる。分類の仕方として「観念」を取り出して「形態」を語る仕方や、逆に「形態」を取り出して「観念」を述べるやり方をするが、いずれにしても、「この言葉の観念はこれで、形態はこうだ」と分類するやり方をする。ここでの「観念」とは「意味」のことで、「形態」とは「音」のことを示す。分類方法は、一見すれば論理的なやり方に映るが、決して論理的ではないとソシュールはいう。なぜ論理的でないのかと言えば、言語学者は言語学とは何かを自覚して研究していないし、研究対象の言葉（記号）そのものが生成する事物だという認識もないと彼は考えて

いる。

「言語学者の活動と注意が向けられている第一の要素は、一方で、単純化しようとするれば間違いとなるような複雑な要素である。また他方で、それらの複雑さにおいて、自然のひとつの単位を奪われているような要素でもある。単に化学的な単体に例えることはできず、そのうえ、化合物に例えることもできない。逆に、例えたければ、化学的な混合物にはむしろ似ている。例えば、呼吸可能な空気における窒素と酸素の混合物のようなものである。」

言葉（記号）は、化学的な単体に例えられないという。つまり言葉は、1種類の元素だけからできている物質ではないし、さらに、化合物でもないソシユールは述べる。化合物とは、2種類以上の元素からできている物質のことをいう。例えば、水 (H₂O) は水素原子 (H) 2個と酸素原子 (O) 1個からなる化合物である。水が水素や酸素とは全く異なる性質を持っているように、化合物の性質は、含まれている元素の単体の性質とは全く別のものであるということもこの譬喩のポイントになっている。しかしあえて言えば、言葉（記号）は、混合物には似ているのだと話す。混合物とは、複数の種類のものが混じり合ってきたもののことをいう。化学的には複数の物質が混じり合ってきた物質のことで、例えば空気は窒素・酸素・アルゴン・二酸化炭素などの混合物である。

この例えをもとに、ソシユールは、言葉（記号）の分類について具体的な説明を続ける。

「第一に、もし窒素や酸素を抜き取れば、空気は、もはや空気ではない。第二に、空気中に広がっている窒素の固まりは、何ものも酸素の固まりに結びつけているのではない。第三に、これらの要素のそれぞれは、同じレベルの他の要素に対してしか分類の対象にならない。しかし、この分類へと移れば、もはや空気の問題ではない。そして第四に、それらの混合物は、混合物としては分類できないわけではない。言語学者が考察する第一の対象の性質は、1つひとつここにある。」

次に、言語学者が扱う言葉（記号）がいかなるものなのかを示唆するのであ

る。

「最後に、人は、次のように言うであろう。『その比喩は、空気の二つの要素が物質的であるという点で粗野である。なぜならば、ことばの二重性とは、物理的な領域と心理的な領域の二重性を表すからである』。この反論は、言語事象にとって重要なものとしてここでついでに形で姿を現す。だが、その反論が不適切であり、私たちが断言していることすべてにおいて直接的に反対のものである、とむしろ述べるために〔ここで（筆者の補足）〕取り上げているのである。空気の二つの要素は物質的な次元にある。そして、ことばの二つの要素は精神的な次元にあるのだ。恒常的な私たちの意見は、意味だけではなく記号も純粋な意識の事象である、と言えるだろう。』

「物理的な領域と心理的な領域の二重性」とは、形態（音）が物理的な領域であり、観念（意味）が心理的な領域であるということ。しかしソシュールは、「どちらも精神的な次元にあるものだ」と断言している。ここで述べる「意味だけではなく記号」という表現の中の「記号」は、「音」のことを指していて、それらは「純粋な意識の事象である」と語る。

ソシュールは冒頭の草稿で「論理的なやり方で」言語学者は言葉（記号）を分類する、と述べている。「論理的なやり方」とは、このことを指していて、物理的な領域として「音」を言葉（記号）から分類し、次に心理的な領域として「意味」を分類する。こうした方法は、正しくないと彼は考えた。なぜなら、言葉は「純粋な意識の事象である」ので、化学物質の分類や動物の分類のようにはいかないからである。では、言語学者は、どのようにして「言葉」にアプローチしていけばよいのか？ その試みが、「草稿」には示されているのである。

2. 「書物」の企てへの言及

ソシュールは、パリの高等研究院の教師を辞職して、1891年に、ジュネーヴに戻って来てから、言語の一般理論に関する論文や書物を一度も発表しなかった。だか、彼は、1891年11月に、書物の作成に関して発言をしたことがあ

った。

「言葉の学問の秩序を乱す主役は、言葉です。そういう言葉の役どころについて書かれた、風変わりだが面白い本が、そのうち刊行されるでしょう。⁽⁴⁾」

ソシュールは、ジュネーヴ大学文学・社会科学学部で教授就任の記念に三回の講演をおこなった。この引用文は、そのうちの第三回目の講演での発言である。言語の一般理論を問題にした書物作成に関して、記録に残る限りでの彼の最初の表明だった。

さらに書物に関する言及は、パリ時代の教え子アントワーヌ・メイエ（1866-1936）に宛てた手紙の中にもあった。書簡の日付は、先の講演から3年後の1894年1月4日になっている。

「しかし、私は、こうしたことすべてに、そして言葉の事象について、常識あることをたった十行でも書くのが、まず困難であることにまったく嫌気がさしています。（……）現在人々が用いている術語法の愚かしさ、それを改革する必要性、そのためには言語一般とはどういう種類の対象であるのかを示す必要性があるのですが、こうしたことのせいで、私の歴史に対する快樂は絶えず損なわれていきます。ところが、私としては、言語一般に関わらないでいれば、それにこしたことはない、と考えていたりするのです。結局のところ、私の意に反して、一冊の書物になるでしょう。その中で私は、感情も情熱も持たないで、言語学には私がなんらかの意味を認めているような術語が1つも使われていないのはなぜなのだろうか、ということの説明するつもりです。正直なところ、そのあとになってからはじめて、かつて放り出してあったところから、私の仕事をまた、はじめることができるのだと思います。⁽⁵⁾」

ソシュールがここでメイエに語っている「かつて放り出した」ことがある書物とは、1893年から1894年の間に書かれたと推測される「一般言語学に関する書物の草稿⁽⁶⁾」と呼ばれるものであり、これから出版されるだろうとする「一冊の書物」の下書きだったと推定される。「一般言語学に関する書物の草稿」が、なぜ読者を前提にした書物の下書きであると分かるのか。それは、「もしもある読者が、私の思索を、この書物の端から端まで、たどることを望んだと

する。ところが彼は、ここでは厳格な順序に従うことが、いわば不可能ということを引きと認めるだろう。」という読者を想定した文章があるからである。

さらに、1895年頃に書かれた、「静態と動態。一般言語学の書物の草稿」と名づけられた手稿が残っている。これには、専門用語を解説したインデックス⁸⁾が準備されていた。

記録にあるソシュールの書物刊行に関する最後の発言は、彼の教え子のレオポルド・ゴートイエに対してなされた。それは、1911年5月6日で、第三回講義が行われた次の日である。5月5日の講義の主題は、言語を構成する具体的な本質体とはいかなるものかであった。

「(このような主題に関して、先生の考えを執筆されたことがあるかどうか、私は、彼に尋ねたことがありました。) うん、いくつかメモはあるけれど、でも、どこかにまぎれてしまったので、見つけ出すことは無理だろうね。(こうした主題に関して、何か出版するべきではないですか、と私は遠回しにいったこともありました。) —あの長い研究を、出版のために再開するなんて、馬鹿げたことだよ。⁹⁾」

ソシュールは、書物刊行のために準備していた下書きを、どこかにしまいこんでしまった、と告白する。時が経って、行方不明になっていた下書きは発見された。それは、1893年から1894年の間に書かれたと思われる「一般言語学に関する書物の草稿」と1895年頃に叙述された「静態と動態。一般言語学の書物の草稿」として姿をあらわした。では、1891年11月の就任講演で克明に語った、「風変わりだがとても面白い本」の原稿は、この二つの書物の草稿を指しているのか。それとも、これらとは別に、三つ目の書物の草稿が存在するのだろうか。

3. 「草稿」の成立年代

新発見の「草稿」は、ゴートイエに語った「長い研究」のはじまりの部分にあたる、ジュネーヴ時代(1891-1913)の早期に執筆された書物の草稿である可能性がある。つまり、ソシュールが何度か漏らしている「幻の書物」の内容をうかがい知るための、最も初期の段階の資料であると思わせるのである。こ

れが、書物の下書きであったという証拠、さらに、1891年11月前後の日付が「草稿」に記載されていれば、パリからジュネーヴに戻ってすぐに執筆した書物の草稿と、言えるかもしれない。

「草稿」が、どの年代に書かれたのかを特定することは可能だろうか。日付が確認できる断片を調べてみよう。「草稿」は、折り畳まれて封筒に入れられていた。ひとつの封筒には、1891年12月と日付が書かれている。「草稿」の中の断片で日付が確認できるものは3つあった。ひとつは、「形態—音声形像⁽¹⁰⁾」と呼ばれる。これは、牧師の娘の婚約の通知状の紙に書かれており、発送した日付と場所が、1891年10月ジュネーヴとなっている。ソシュールは、送られてきた通知状の紙に執筆していた。さらに、「音声の変化と意味の変化⁽¹¹⁾」と呼ばれる断片には、年はなく12月5日と記されていた。そして、「平行⁽¹²⁾」と呼ばれる断片には、91年12月6日と控えている。

「草稿」には、書物の下書きとして想定されるいくつかの事実がある。ソシュールは、書物の最初に記す「序文⁽¹³⁾」という文字を書き込んでいた。また、重要なキーワードを解説した、「インデックス⁽¹⁴⁾」という項目もある。さらに、「はしがき」といわれる断片には、小冊子を意味する「opuscule」という言葉が用いられている。しかも、その断片には、「草稿」が何を対象にして書かれたのか、をはっきりと述べている。

「私たちの叙述の大きな障害は、(……) この小冊子が、対峙するために運命づけられた〔言語学の(筆者の補足)] 誤謬そのものから来ている、ということを私は言わずにはいられない。⁽¹⁵⁾」

ソシュールがここで述べている「誤謬」とは、後の第一回講義において、「言語学上の誤謬とは、ベーコンが言葉に関する洞窟(誤解)と呼んだものばかりか、言語学のもつイドラ〔幻像)をも指している。⁽¹⁶⁾」と学生たちに話した哲学者ベーコンの思索が背景にある。ベーコンは、『新オルガノン』(1620年)の中で、四つの先入見を取り除いて事象を観察するべきであると提唱した。四つのうちの二番目に挙げられた先入見が、「洞窟のイドラ」であり個人のもつ偏見のことを指している⁽¹⁷⁾。これとは別な他の「歴史的統辞論⁽¹⁸⁾」という草

稿の中にも、「誤謬」と「洞窟」という言葉が出てくる。

「第一に、私たちが述べた統辞論とは、次のような逆から見た形態論と別のものでは決してない。したがって、次の考えの中にはすでにある。統辞論は、多かれ少なかれ、時間を通して研究される形態論と定義される領域を共に構成する。しかし、形態論を除いて研究されることが適切である。その後では、もはや打つてがもてない、これらの誤謬の中のひとつ、あるいは洞窟の中のひとつとなる。」

ソシュールが、この草稿で述べている「時間を通して研究される」統辞論や形態論とは、通時的・歴史的形態論のことである。そして、一般的には、統辞論や形態論の領域を個別にわけて、それぞれの働きを考察しようとする。そうしたやり方は、洞窟のイドラと呼べるものであり言語学上の間違った見方である、と彼は述べているのである。さらに、統辞論や形態論は、時間を通して追跡できるような事項ではない、とも付け加えている。

実はソシュールは、就任講演が終わった翌月の1891年12月30日付けで、ある人物に手紙を書いている。そこには上記の草稿で語られている形態論の問題が述べられている。そして、「草稿」の中で問題視した彼以前の言語学への懐疑、つまり誤謬が語られていて、さらにまた、書物執筆への動機が十分にうかがえるのである。

4. ガストン・パリスへの手紙と「宣戦布告」

1891年12月30日に、ソシュールは、パリ時代⁽¹⁹⁾ (1880-1891)の恩師ガストン・パリスに手紙⁽²⁰⁾を書いている。手紙は、年末年始の挨拶に始まり、返信が遅れたことを詫言っている。11月に三回にわたって行われた、ジュネーヴ大学文学・社会科学学部での教授就任の記念講演の準備に手間取り、その講演の主題に夢中になったので、返事が出せなかったというのである。

「講演の主題は、まったくはじめての仕事に私を導きました。(……) 恥ずべきことですが、ここ5週間、書くべきであり、書こうと熱望していた手紙を、一通も出せ

なかったのです。」

三回目の就任講演が終わってから 12 月 30 日までの 5 週間、ソシュールは、パリスの理論に刺激を受けて、ラテン語とフランス語の展開について熟考していたのだという。彼は、一回目の就任講演の中でパリスの名前を挙げて、次のように聴衆に話している。

「うれしいことに、(……) ガストン・パリス氏は、最も流布していて、外見上いちばん単純なふたつの言い回しに、容赦のない宣戦布告をしようとしています。⁽²¹⁾」

パリスの「宣戦布告」は、「フランス語はラテン語から来ている⁽²²⁾」と「〔フランス語の〕 *chanter* [歌う] はラテン語の *cantare* から来ている⁽²³⁾」というふたつの言い回しに対してなされた。パリスは、フランス語がラテン語の子語である、という言語の起源を問う考えに疑問を呈していた⁽²⁴⁾。これがなぜ、宣戦布告といえるのだろうか。現在でも脈々と途絶えることがない、19 世紀的思考というものがある。それは、民族や文化や言語は、密接に結びついていて分けることができないものであり、学問上その起源をたどることができる、という超越論的な思考のことである。そのことは、三回目の就任講演の発言⁽²⁵⁾の中で説明される。ソシュールは、ふたつの重要な問題に言及する。

「ひとつの言語がもうひとつの言語を継ぐことは決してありません。たとえばフランス語がラテン語を継ぐというような。(……) ふたつのものをめぐるこの架空の継承は、同じ特有語に相次ぐふたつの名前を与え、それゆえ、時間の中で分離したふたつのものを、恣意的に作りあげるのが私たちの好みである、というたったそれだけの理由から来るのです。」

言語学者が研究対象とする題材は、どのような根拠をもって選ばれるのだろうか。ラテン語とフランス語は、用いられた時代も地理も異なる。それは、「時間の中で分離したふたつのもの」である。そして、それらを結びつけるのは、言語学者が「恣意的に作りあげる (……) 好み」にまかされる。つまり、ここで問題となるのは、言語学者が、自分の研究対象を確かな根拠もなく選択

している、という言語学者の恣意性である。

もうひとつは、言語そのものの問題である。

「おそらく、この種の相次ぐふたつの名前が、私たちの精神に与える影響は、決定的で、堅固で、取り除けないものです。」

言語学者は、言語の働きを説明するのにことばを必要とする。彼は、研究対象である言語を、ことばでもって語るのである。しかし、当の言語学者は、自分がいったん発言した内容や説明するのに使った用語を、いちいち振り返って説明しようとはしない。もしそうしたならば、彼の言明は、メタ言語の繰り返しになるからだ。したがって、言語学者がやっていることは、自分が言語に認める性格がどんなものであろうとも、この性格は当の性格を言い表す言明に理論上属することになる。すなわち、ことばを使用する言語学者に対する言語の影響が、問題なのである。「はしがき⁽²⁶⁾」と呼ばれる「草稿」で、ソシュールは、自説の妨げになる障害について語る。

「私が心配しているのは、その障害が、読者たちの精神にまで及んで、私たちの考察の意味を絶えず歪めてしまうことである。」

その障害とは、言語学者の恣意性と言語学者に対する言語の影響がもたらしたものである、と考えられる。

5. 形態論と音声学の学問上の境界線

ソシュールは、先述したパリスへの手紙の中で、形態論と音声学の理論上の曖昧な境界線に、疑問を呈している。

「私が信じているのは、歴史的形態論（文法）は少しも存在しないし、また逆に、瞬間的な音声学⁽²⁷⁾は少しも存在しない、ということです。」

ソシュールのいう歴史的とは、通時的という意味である。彼は、「形態論—

言語状態⁽²⁸⁾』と名付けられた「草稿」の中で、形態論を「何が完了形の形態であるのかを決定する」ことだと定義している。つづけて彼は、「諸記号の働きから諸形態を引き離すことは、まったくの幻想である」と述べる。言語記号の形式面（形態）だけを取り出して分析しても、音声面を考慮に入れなければ、その形態が何であるのかさえ理解できない、と指摘する。彼は、「ことばの生⁽²⁹⁾』という「草稿」で、歴史的ではない形態論について論じる。

「記号と観念がある。しかしその場合は、逆に、時間の継起がない。その瞬間を完全に、そしてその瞬間をもつばら、尊重する必然性がある。これは、形態論（……）の領域である。」

もう一方の、瞬間的な音声学とは何であるのか。ソシュールが用いる「瞬間的」とは、後になって使った共時的と同義である。彼は、「形態論－言語状態」において、「どういう場面で母音字が省略されるのか、あるいはどういう場面で p が f に代わるのかを決定する」ことを音声学の定義に置いている。これにより、「諸記号の働きから記号の音声的諸要素を引き離すことは、まったくの幻想である」と語る。言語記号から音声面だけを取り出して考察しても意味をなさず、同時に形式面（形態）を保持しなければならない、と言及しているのである。「ことばの生」の中で、やはり彼は、瞬間的ではない音声学を次のように記す。

「記号と時間の継起がある。しかし、その場合は、記号の中に観念はない。これは、人が、音声学と呼ぶものである。⁽³⁰⁾」

このように、ソシュールが「草稿」に記した形態論と音声学の論述は、パリスへの手紙にはっきりと書かれていた。

「言語の音声学的観点は、《継続》と《意味をまったく捨象したもの》を前提にしている。——そして、形態論的（文法的）な観点は、《時代の同一性》と《意味、価値、使用を考慮にいれたもの》を前提にしている。それらの間に（……）最も重要な対立があるのでしょ。

パリスへの手紙が書かれた、1891年12月30日に極めて近い時点に執筆されたと推定することができるだろう。就任講演が終わった前後から幻の書物の執筆に取りかかったとすれば、これは、ちょうどその時期の最中にあたる。手紙には、ソシュールが、これから直面する困難について綴られていた。

「私は、このような見方を分っていただけるように努めますし、推し進めるつもりです。ただし、明らかなことですが、この見方は、根本的な問題すべてにかかわります。したがって、その分析をどこまで進めてよいものか、困難を極めます。」

ソシュールは、パリスに自分の心境を打ち明けることで、自分が直面しなければならない、困難な道のりを自覚したのかもしれない。実際に、この手紙から3年後の1894年に書かれた「ホイットニー追悼⁽³¹⁾」の下書きで、ソシュールは、どんな学派とも意見を一致することはない、と語っていた。同時代に誰とも共有し得ないような言語の概念を打ち建てる、という自覚が、パリスへの手紙からうかがえるのである。

6. 様々な執筆年代を想像させる「草稿」の記述

「草稿」の中には、1910年11月15日の第三回講義で、学生たちが筆記した文章⁽³²⁾と、ほとんど同じ文面が存在する。この日の授業は、言語の地理的な差異と時間が主題であった。ジョゼフのノートを見てみよう。

「地理的な差異は、〔言語の／筆者の補足〕同一性の観念を、すぐに呼び起こします。同一性とは、具体的に、どこにあるのでしょうか？ それは、過去の中にあり、すなわち、時間の中にあるのです。」

これらの部分に該当する、「地理的な非連続性⁽³³⁾」という紙片におけるソシュールの記述を、取り上げてみよう。

「地理的な差異は、同一性の観念を呼び起こす。この同一性とは、どこにあるの

か？ それは、過去の中にある。それゆえ、時間の中にあるのだ。」

ソシュールと学生たちの記述は、この後に続く文章もほとんど変わらない。この紙片は、講義の準備のためのものか、あるいは講義を終えてから記した文章なのか。いずれにせよ、1910年前後に執筆されたものであろう。

また、「記号体系—集団⁽³⁴⁾」とされる紙片には、Melioris という固有名詞をテーマにしたアナグラム⁽³⁵⁾の記述が残されている。アナグラム研究は、1906年5月から1909年4月まで行われたと考えられている。さらに、「ファバール-フォール（ファーヴル、フェーヴル、ルフェーヴル、ルフェーブル）⁽³⁶⁾」と呼ばれる紙片では、「フランス共和国の新大統領の名前」としてフェリックス・フォールをあげている。彼は、フランス第三共和政の時代、1895年に大統領に就任した実在の人物である。したがって、この紙片は、1895年以降に書かれたと推定できる。

このように、「草稿」には、就任講演の行われた1891年末から、第三回講義がもたれた1910年前後までに書かれたものが混ざり合っている。では、その中から、ソシュールが、1891年の初期の時代に執筆した、と思われる幻の書物の下書きは、特定できるのだろうか。その作業は、彼が言語研究の初期の段階で話題にしていたひとつのテクニカルタームを追いかけていけば難しくはない、と思われる。その用語こそ、「音声形像（figure vocale）」である。これがソシュールの言語論において極めて画期的な概念となってくるのである。

「草稿」は、1891年から1910年頃に執筆されたものであろう。ここまで記述してきた年代特定に関する内容を図に整理してみよう。

封筒に記された日付	1891年12月
紙片に記された日付	1891年10月、年はなく12月5日、91年12月6日
実在の大統領の名前を叙述した紙片	1895年に就任して1899年に死去。
アナグラム研究が綴られている紙片	1906年5月から1909年4月
第三回講義の学生のノートと同じ文面の紙片	1910年前後

このような幅広い年代にかけて書かれたと推測される「草稿」の中から、ソシュールが1891年頃に執筆したものの出版されることがなかった「幻の書物」に焦点をあてるために、その当時、彼が頻繁に用いていた、音声形像 (figure vocale) という用語を取りあげる。この用語は、「草稿」の紙片においてあちらこちらで散見できる⁽³⁷⁾。また、1893年から1894年の間に書かれた「一般言語学に関する書物の草稿⁽³⁸⁾」や1894年頃に執筆された「ホイットニー追悼⁽³⁹⁾」の下書きでもしばしば言及されてきた。しかしこの語は、それ以降あまり用いられず、一般言語学講義 (1907年～1911年) の中でもあまり使われていない。つまり音声形像は、1891年から1895年の間に特に使われていた用語であるといえる。したがって、この語を追い求めていけば、「幻の書物」のために書かれたのが、「草稿」中のどの紙片なのかが見えてくるに違いない。そして音声形像は、この「幻の書物」のテーマを明らかにする用語でもある。

7. 「音声形像」と「形態-意味」の対立

音声形像という用語が、どんなものかを明らかにするために、「草稿」のいくつかの紙片から文章を引用しよう。ソシュールは、「言語学における対象の性質」⁽⁴⁰⁾と呼ばれる紙片で、音声形像について具体的に言及している。音声形像とは「たとえば mer (m + e + r) という発声音の連続」のことであり、それは「音響学や生理学の領域の中に含まれる」もので、「言語学の本質体ではない」という。ソシュールは、音声形像を言語学の「本質体ではない」として研究対象においていない。音声形像は、「音響学や生理学」の分野であり音声学

に属するものと、彼は考えている。また「二重性の原理⁽⁴¹⁾」と呼ばれる紙片では、「私たちにとっては、音波の継起にまで還元された記号は、音声形像の名前にしか値しない」と言明する。音声形像は、「発声音の連続」であり、「音波の継起まで還元された」ものであると彼はいう。この発言から、音声形像を物理音そのものであると言っていることは明らかであろう。

音声形像が物理音であることは、「草稿」の中の「序文⁽⁴²⁾」と「一般言語学に関する書物の草稿」の文章を対比することではっきりとする。まず、「序文」の文章を引用しよう。

「形態と意味を対立させるのは、間違い（実現不可能）である。逆に正しいことは、一方で音声形像を、他方で形態-意味を対立させることである。」

次に、「一般言語学に関する書物の草稿⁽⁴³⁾」の文章を取りあげる。

「物理音に対立できそうなものの中で、私が、本質的にこの先一步も譲らず否定するのは、それに対立する観念というものである。物理音に対立できるのは、音-観念のグループであって、絶対に観念ではない。」

前の文では、音声形像と形態-意味を対立させている。後の文は、物理音と音-観念の対立がある。音声形像が物理音であり、形態-意味は音-観念のことであるのがわかる。そして「序文」でソシュールは、「内的な現象つまり意識の現象と、直接的に捉えることができる外的な現象とを、言語の中で区別する理由がある」と記す。彼が述べる内的な現象とは、形態-意味のことであり、外的な現象が音声形像を指している。先述した「意識によって知覚される」ものが内的な現象である形態-意味にあたる。一方「意識によって知覚されない」ものが外的な現象である音声形像を指す。しかし音声形像は、直接的に捉えられるものなのだが、「知覚されない」存在でもあることになる。「知覚されない」ものを言語で語るのだから、それはもはや知覚されているものである。「知覚されない」ことを「知覚した」と言い換えても、結局それはレトリックの問題であって、言語でもって語っていることにはかわりがない。ソシュールは、こ

ういった言語の反射律を相手にして、「知覚されないもの」を「直接的に捉えられるもの」という言葉で置き換えをしている。彼は、この考えを可能にするために、「二重性の原理」の中で、物理的事象〈音声形像〉は「客観的」であり、物理的〈形態〉-精神的事象-〈意味〉は「主観的」であると論述した。

ここまで述べたことを整理すると次のようになる。

直接的に捉えられるもの——音声形像（物理音）——外的な現象——客観的

意識によって知覚されるもの——形態-意味——内的な現象——主観的

客観的視点によって直接的に捉えられるものは、外的現象の音声形像である。この客観的視点とは、歴史的視点とも呼べるもので、言語学者による視点のことである。主観的視点により意識として知覚されるものは、内的な現象の形態-意味を指す。主観的視点とは、瞬間的視点と言えるもので、話し手による視点のことである。「幻の書物」を執筆していたこの頃のソシュールは、自分という話者が、どのような視点でもって話しているのかに注目していた。そして、彼は、ふたつの視点をもって話していることに気づく。後に語られる通時態と共時態の理論に通じる発想が、ここからもうかがい知れるのである。

音声形像が物理音という音であるならば、形態も音のことであるので、あえて区別する必要があるのかという疑問がでてくる。ソシュールは、「形態-音声形像⁽⁴⁴⁾」と呼ばれる紙片の中で、「音声形像は、人が言語と呼ぶ記号の働きの中に取り入れられる決定的な瞬間から、ひとつの形態となる」と語る。音声形像は、発声音そのものであるのだが、その発声音が意識によって知覚される「決定的な瞬間」が訪れることで、形態となり、はじめて言語と呼べるものとなると彼は述べるのである。さらにその形態は、「決定的な瞬間」をもつと同時に意味とペアになって、「一方が他方に解けないほど固く結びついた⁽⁴⁵⁾」記号になるという。

「形態-音声形像」の中で、音声形像が、話者にとってはっきりと意識され、形態と呼ばれるものとなり、同時に意味を担う記号となる瞬間を説明するために、「船底に眠る布が掲げられた瞬間に、あるシグナルになる」という比喻を用いる。音声形像が、「船底に眠る布」である。その布が話者の意識によって捉えられる瞬間に、布はシグナルとなる。音声形像が、話者の意識にとってシグナルとなった瞬間に、形態は何らかの意味をともなった記号になる。ソシユールは、形態-意味というシグナルを次のように論述する。まず「同時に掲げられる他の記号の中に〔掲げられる瞬間から（筆者の補足）〕、そうやってひとつの意味を〔複数の旗が（筆者の補足）〕協力して実現するのである」という。さらに、「掲げられることができたはずの他のたくさんの旗の間で、その想起は、やはり〔意味（筆者の補足）〕を為すのに力を貸しているのに違いない」と語る。ある音声形像が連続された発音となる時、いくつもの意味が形態と協力してひとつの意味を生成していく。また、意識によって知覚される可能性があった意味の候補が、協力してひとつの意味を為していく。

ソシユールは、言語（記号）は、形態-意味からなると述べる時、人は形態と一致するひとつの意味だけを、あるいは意味と一致するひとつの形態だけを想起してしまうと考えた。「二重性の《第一にして最終的な》原理⁽⁴⁶⁾」の中で彼は、言語学者が「論理的に見えるようなやり方で、観念を分類して、次に形態を理解しようとする。それとは逆に、形態を分類して、次に観念を理解しようとする。（……）言語学者は、自分の研究とそれらの分類の明確な対象〔つまり記号（筆者の補足）〕を、何が構成するのかということを理解しない。ふたつの領域を結びつける点をまさしく理解するべきである」と叙述する。「草稿」の「はしがき⁽⁴⁷⁾」という紙片で叙述した、「言語学の誤謬」や「考察の意味を歪めてしまう障害」の原因となるものは、多くの言語学者によって作られる。だからソシユールは、自説はどんな学派とも共有できないと語る。彼は、未完に終わった「草稿」の中で、音声形像という用語を持ちだして、形態-意味という記号とそれを対立させることで、言語は何が構成するのかを明らかにしようとしたのである。

8. 結び

未完の「草稿」が書かれたのは、1891年から1895年頃であろうと想定される。ソシュールは「草稿」の中で、やっとのことで、そして徐々にではあるが「話し手の視点」というものを発見していく。同時に、様々な視点の不確かさを指し示すことを試みる。共時態に関しては、話し手の視点のみがあるとする不確かさを。さらに、通時態に関しては、言語学者の視点のみがあるとする不確かさである。つまり、「草稿」が書かれた時期には、彼の思索は暗中模索の中にあっただと言える。後になって、主観的な分析（話し手＝共時態）と客観的な分析（言語学者＝通時態）としてはっきり提示されるのだが、それらの視点のあり方も、この「草稿」の中にすでにうかがえるのである。

〈了〉

注

- (1) 1996年までに発見されたソシュールの草稿や書簡は、ソシュール家によってジュネーヴ州立公共・大学図書館に寄贈され、図書館側は、これらの資料のカタログ作成に着手した。2004年に、*Catalogue des manuscrits de la bibliothèque publique et universitaire*. (tome XII D, archives de Saussure, 366-414, 2001-2004) というタイトルでカタログを完成させた。『草稿』は、資料番号 Ms.Saussure.372bis（コピーしたもの）で閲覧できる。
- (2) 『草稿』は、ジュネーヴ市内のソシュール家邸宅で偶然見つかった。邸宅に住むソシュール家のある夫人が、オランジュリー（果実を栽培するために使っていた温室。現在そこは物置小屋となっている。）を整理していた時、段ボールの中に草稿がいくつも入っていたのを発見する。彼女は、ローザンヌ大学のヴィンセント・パラスに僅かな金額で、売ってしまった。その後、『草稿』は、エングラールの手へ渡って、ジュネーヴ州立公共・大学図書館にはいり、2002年に、パリのガリマール社から、エングラールとブーケによる校訂版として出版された。『一般言語学文書』（ELGと記す）（Ferdinand de Saussure, *Écrits de linguistique générale*, texte établi et édité par Simon Bouquet et Rudolf Engler, Gallimard, 2002.）
- (3) ELG. p.17-19, 2a [*De l'essence double: Principe « premier et dernier » de la dualité*]
- (4) ELG. p.166.

- (5) F de Saussure, « Lettres de Ferdinand de Saussure à Antoine Meillet », publiées par Emile Benveniste, *Cahiers Ferdinand de Saussure*, no 21, Genève, Droz, 1964, p.95.
- (6) *ELG*. pp.197-202. [*Notes pour un livre sur la linguistique générale*]
- (7) *ELG*. pp.222-33. [*Status et motus, Notes pour un livre de linguistique générale*]
- (8) *ELG*. pp.227-28.
- (9) Godel, *op.cit.*, p.30.
- (10) *ELG*. pp.37-40, 6e [*Forme-Figure vocale*]
- (11) *ELG*. pp.40-3, 7 [*Changement phonétique et Changement sémantique*]
- (12) *ELG*. pp.62-3, 18 [*Parallélie*]
- (13) *ELG*. pp.17, 1[*Préface*]
- (14) *ELG*. pp.81-2, 28[*Index*]
- (15) *ELG*. p.45, 9[*Avis au lecteur*]
- (16) E. 73.エングラール断章番号 73 番。
- (17) 丸山圭三郎、『ソシュールを読む』、岩波書店、1983年、64頁。丸山は、言語学のイドラに関して「言語に関するいわゆる個人的偏見、常識の嘘が、実は言語学という〈学〉そのもののイドラによって作られている指摘なのです」と、的確にソシュールの意図を伝えている。
- (18) *ELG*, p.85 [*Syntaxe historique*]
- (19) 清水康行、「F・ド・ソシュールのパリ高等研究院における「授業報告」(1881～1889)」、『日本女子大学紀要』、第46号、1997年を参照。
- (20) *Cahiers Ferdinand de Saussure*, Genève, Droz, 1994(1995), 48, pp.78-81.
- (21) *ELG*. pp.152, 2a [*Première conférence à l'Université de Genève (novembre 1891)*]
- (22) *ibidem*.
- (23) *ELG*. pp.153, 2a [*Première conférence à l'Université de Genève (novembre 1891)*]
- (24) Cf., G.Paris, *A Manuel d'ancien Français*, Paris, 1888. *Extrait de la Chanson de Roland*, 2e éd., Paris, 1889.
- (25) *ELG*. pp.164, 2c [*Troisième conférence à l'Université de Genève (novembre 1891)*]
- (26) *ELG*. p.45, 9[*Avis au lecteur*]
- (27) 鈴木隆芳、「ソシュールの音声学における音の単位について」、『日本フランス語フランス文学会関東支部論集』第10号、2001年12月20日を参照。
- (28) *ELG*. p.35, 6b[*Morphologie-État de langue*]
- (29) *ELG*. p.54, 12[*Vie du langage*]
- (30) *ELG*. p.54,
- (31) *ELG*. p.213, 11[*Notes pour un article sur Whitney*]
- (32) E.2950.

- (33) *ELG*. p.293, 7[*Discontinuité géographique*]
- (34) *ELG*. p.289, 5[*Système de signes-Collectivité*]
- (35) 岡村民夫、「ソシユールのアナグラム再考－詩とシーニュー－」、『立教大学フランス文学』、第 26 号、1997 年を参照。
- (36) *ELG*. p.134, 5[*faber-Faure (Favre, Fèvre, Lefèvre, Lefébure)*]
- (37) *ELG*. p.17, 1 [*Préface*], p.21,2d [*Principe de dualisme*], p.26,3d[*Domaine physiologico-acoustique de la figure vocale*], p.29,3g [*Valeur et formes*], p.31,5a [*Son et sens*], pp.37-38,6e [*Forme-Figure vocale*], pp.41-42,7 [*Changement phonétique et changement sémantique*], pp.44-45,8 [*Sémiologie*], p.50,10a De l'essence, etc.[*Perspective instantanée et phonétique. État*],p.67,22a [*Phonétique et morphologie*],p.73,24 [*Signes et négativité*],p.81, [*Index*]. 上記のように、音声形像 (figure vocale) という用語は、エングラの分類した紙片のタイトルの中で 12 項目に及んで使用された。
- (38) *ELG*. pp.197-202. [*Notes pour un livre sur la linguistique générale*]
- (39) *ELG*. p.203-222, 11[*Notes pour un article sur Whitney*]
- (40) *ELG*. pp.19-20,2c [*Nature de l'objet en linguistique*]
- (41) *ELG*. pp.20-21,2d[*Principe de dualisme*]
- (42) *ELG*. p.17,1[*Préface*]
- (43) *ELG*. p.202.
- (44) *ELG*. pp.37-38,6e [*Forme-Figure vocale*]
- (45) *ELG*. p.21,2d[*Principe de dualisme*]
- (46) *ELG*. pp.18,2a [De l'essence double:Principe «premier et dernier» de la dualité]
- (47) *ELG*. p.45,9[*Anis au lecteur*]